

0 先生といふ人

岡本 悠

勉太は、あまり尊敬できなかった...

勉太は、高校を中退したあと、

しょっちゅう、家出をしていた

ある日、二子玉川の辺りで

ガレージを閉めているオジサンに

家出をしたので、靴だけ貸してくれませんか？

と言うと、中へ入りなさい、と言われた

事情を説明すると、

母を電話で呼んでくれた

その節、O先生という方を紹介してもらった

金八先生みたいな先生だ

と云った

O先生は、自宅で、個人塾を開いていた

O先生は、「君は、気に入らないことがあると爆発してキレちゃうなんて、子供みたいだ」と言った

それは、わかっていたが...

今、思えば、O先生は、あまりお世辞などは、言わない人だったと思う

暴力や、言葉の攻撃をする人ではなかった

ある日、0先生は、自分はヒッチハイクをしていた、と、言っていた

俺が、少し食いついたが、

君には、無理だろうね、と言われた

ある時は、日本でできなかったことが、海外でできるはずはない、と言った

ただ、これを父に言うと、

海外に飛び出せば、できることもあるかもね、とも言った

ある時、0先生の長い、恋愛話を聞いた

とにかく長かった

でも、俺が、聴きたいと言ってしまった

...

翌日、何かの弾みで、また、0先生の昨日の恋愛話が聴きたいと言ってしまった

0先生は「またかよ」と言い、しばらくして「しょうがねえな～」と言った

俺は、ヤバイと思ったが、結局、最後まで聞いた

今なら、為になったかもしれないが、何も憶えていない

0先生は、小説を書いていると言った

内容は知らなかったが、「君もこういうことをしたほうがいいよ」と言った

0先生は、昼間は、塾の先生をしていたが、

夜は、花屋の仕事をしていた

花屋の若い社長の元で、働いているから

年下に、指図されるんだ、と言っていた

その全体の意図は、よく掴めなかった

塾の先生1本じゃ駄目なのか？ なぜ、年下の花屋なのか？ 小説と関係あるのか？ 違う何かか？ 生きていく為か？

俺は、音楽をやっているから、ということで、歌詞をコピーして、渡した、やはり、褒めることはなかった、「決して」という表現が多いね、とか、そういうことを言われた

ある時は、CDを作りました、とは言ったが、CD自体は渡さなかった、あまり、自信がなかったし、褒められないと思ったからかもしれない、まあ、自信がなかったのだが、恥ずかしさもあつたし、0先生は「そういうのも、見せなきゃな」と言った

NHKで「真剣10代しゃべり場」という番組がやっていたが、0先生は「ああいう番組に、出て行ったほうがいい」と言った、俺は、とんでもない、という態度をとったが、まあ、言っただけじゃダメという見方もできたし、やはり、カッコ悪いと思った、そういうセンスからは考えないのかなあ、とは思った

ある日、母と一緒に連れていった、0先生は、母の目を見て、まともに喋ることが、できなかつたように見えた、最後に「そうだろ、勉太」と、こっちに振ったのだけは、憶えている

ある日は、祐輔を連れていった、恋の話を相談させたかつたからだ、3人でいろいろと話したが、帰り、解決には至らなかつたと、祐輔は言った

後日、0先生は、あれから祐輔は元気か? と言ったが、俺は、「いいじゃないですか?」と、自分の話に振ろうとした、そうしたら0先生は、「そういうことが大事なんだ」と、祐輔のほうが大事そうに話していたので、俺はしらけてしまった

0先生の塾のアパートの下の、鍋焼きうどん、が、美味しい、と言うと、0先生は、「勉太が、食べたいというから、連れてきたよ」、と店主に言った

ある日、0先生の車に乗って、二子玉川の野球場のような場所に2人で行った、面白いという感情はなかつたが、野球チームの試合の観戦はまあ、良かつたが、何かの言葉にイラついたのか、帰りの車で、もう、ここで降りしてください、と言った、0先生は、感じたのか、もう少し送ってから、降ろした

0先生の生徒が、交通事故で、身体障害者になった、という話をしていた、さすがに、0先生も深刻そうだったし、俺は、よく、そういう人と向き合えるな、と、感心していた

俺は、人生に行き詰まり、家出をして、渋谷でアルバイトをした、でも、家を嫌って、0先生の電話番号を教えてしまった、俺は、渋谷のアルバイトを途中で投げ出して、実家に帰ってしまった、ほんとうは、0先生の家に行こうとしたのだが、夜中にピンポンして、起こすのは、いくらなんでも迷惑だと感じた、

その後、おそらく、渋谷のアルバイトのことで、なんにも事情の知らない0先生は、ビク

りして、内容を聴いて、知らぬ存ぜぬ、を、してくれたかもしれない

また、勉太が、0先生を求めた時は、俺はもう死んでるかも な、とも言っていた

俺は、0先生を、0先生と呼んだが、皆は「～ちゃん先生」と呼んでる、と言われたが、俺はそのように呼ぶことはできなかった

果たして、0先生とは、どういう人だったのだろうか？

今、喋っても、痛いところを突かれるであろう から、やりにくいかもしれないが、ただ、おべっか、だけを言う人ではないと思う

正直、俺のような甘やかされた人間は、嫌いだったかもしれない

ある種、俺と、0先生は、真逆の人間だったのであろうか

聴いたことはないが、女に対する考え方も、違うかもしれない

俺が、年賀状で、0先生宛てに、送った時、もう、住所が変わったと、印鑑が押されていた

0先生は、面倒臭いから、知らせかったわけではない、悪い意味ではなく、俺を切った、ということだろう

俺は、捨てられた

でも、それが、0先生なりの、最後の授業だったのかもしれない...

「完」